〔V〕読書感想文指導からみた国語科教育の二三の問題

酒　井　為　久

I　読書感想文指導の我校における実例

我校の読書感想文指導を一言で言い表すならば，コンクール応募型であると言うことができ，コンクール応募作品選定段階での特定教官の指導が，教科教育や図書館活動および家庭教育における読書と感想文教育を総合し集約しうるかどうかにすべてがかかっていると言い得る。その際のねらいは，読書感想文のなかのすぐれたものをより一層充実させること，即，地味で忍耐を要する読書の成果を感想文という形で陽の目を見させることが，生徒の内面を豊かにする読書感想文活動の明確な努力目標となり，刺激となることを期待することにあると言えよう。

その実例として，52年3月に発行した読書クラブ誌「読書感想文　五年間の入賞記録　名古屋大学教育学部附属中・高等学校」を紹介したいと思う。これは，入賞読書感想文を集めた小冊子で，次に掲げる作品を載せたのであるが，これが47年度から51年度の五年間の入賞作品のすべてである。

51年度　22回コンクール
　全国学校図書館協議会長賞　全国優良
　愛知県最優秀
　　高1　平山知佐子　「生きるための自由」を読んで
　愛知県優良
　　高1　宮本真理　フランソワーズ・サガンの世界　「悲しみよこんにちは」より
50年度　21回コンクール
　愛知県優秀
　　中3　平山知佐子　「自然・文学・人間」を読んで
　　高2　光岡真弓　愛は不義とみる「義血侠血」
　愛知県優良
　　高2　渡　知子　「アラスカ物語」を読んで
49年度　20回コンクール
　全国入選
　愛知県最優秀
　　中2　平山知佐子　「花咲か」を読んで
　愛知県優秀
　　高2　五味宏子　科学の歴史に思う
　愛知県優良
　　高1　山口百合子　「月山」を読んで
　　高1　渡　知子　「闘」を読んで
　　高2　加藤真佐子　「化学入門」を読んで
48年度　19回コンクール
　愛知県優秀
　　中2　木村仁美　赤いベレーの恋人
　　中3　久岡孝子　「無限」を考える
　愛知県優良
　　高2　倉知万里　「たけくらべ」を読んで
47年度　18回コンクール
　全国学校図書館協議会長賞　全国優良
　愛知県最優秀
　　中2　久岡孝子　「ローソクの科学」を読んで
　愛知県優良
　　中2　山口百合子　「にんじん」を読んで

この小冊子の序として，私が書いた拙文を次に再録したいと考えるのは，読書感想文という一点から学校図書館教育や読書指導そして国語科教育の在り方を見通してみようとする執筆意図だけは明瞭であったと，一年以上たった現在思い起こすことができるからである。以下は，その序である。

資料1

本校の読書感想文コンクールに，私が関与するようになって，五年が経過した。この間，本校生が連続して青少年読書感想文の愛知県コンクールや全国コンクールに入賞することができた。五年目の本年度は，高一の平山さんが全国コンクールに入賞したのを含め，読書というような目立たない文化活動で，4ページに記録してあるような成績を収めてきていることは，創立三十周年を迎える本校にとって初の出来事であり，誇りにしてよいことである。この機会を，さらに読書活動振興に結び付けたいとも考え，読書クラブ誌として，入賞読書感想文集を編集することを計画した。

これらの入賞読書感想文は，毎年，中一から高二までの夏休み宿題として課したものから，国語科教官によって校内入賞作品が選び出され，その中から厳選した作品を校外コンクールに応募して入賞したものである。われわれとしては，宿題として提出された読書感想文がすべて充実していることを期待しているわけであるが，校内全体の読書感想文への取り組みということになると，いくつかの問題が見受けられる。まず，個々の生徒に，読書し感想文を書こうとする積極的な姿勢が欠如しているのではないかという問題がある。

次に，学年によって熱心に取り組む傾向が見られるところとそうでないところが目立つことである。

その原因を，生徒個人の努力の過不足に求めたり，テレビ視聴を軸とする受け身の生活環境に探るのは容易であるが，そうした観点だけでは生徒の伸長には資さないであろう。私は，読書感想文の位置づけや取り扱いの側から，反省をこめて考えねばならないと思っている。およそ，読書や作文は，その過程で脇から口をはさむことは無意味であり，読書すべき必然，作文すべき必然に従ってそれまでの学習成果が総合された形で自然進行していくものである。だから，指導者としては，事前の動機づけを中心に考えておく以外の方法がなく，それも宿題として課す直前の動機づけ，即，ことばによる直接的なものの外に，教育の場におけるかなり長期の動期づけ，言い換えると，先生と生徒の信頼感が有効に働くようにも感じている，そうしたものに依るだけだといえるのである。そういう観点から，読書活動不振の原因を探る心構えが大切だといえる。

読書したことに関する作文は，自由選題の作文が自己の現在を語るのに対し，読書によって拡大された自己を定着させる意義をもっている。読書そのものは，豊かで孤独な個人的作業であるが，本年度前期四十五名，後期六十二名の読書クラブの指導を通して考察してみると，読書に集中できる本を選び読書に集中できる者とそうでない者があるところに，読書指導の現実の問題が示されているといい得る。つまり，読書は，書物の内容の読解である以前に，読書者の生活習慣であり，読書指導は読書習慣のしつけであるといえるのである。

読書の習慣を身に付けて成長してきている諸君には，古典に価する書物を中心とした少しの助言が生かされて，書物との無限の対話の世界が開かれている。それが感想文を書くことの必然となり，情報過多な現代において情報選択の新しい価値観をうち立てる素材ともなり，人間の内的成長を促すことにもなるのである。すぐれた読書感想文を書く生徒は，よい読書習慣を身に付けてきている生徒である。読書クラブの時間や国語の授業でできることは，全員に共通した読書法の「型」を与えることに過ぎないであろう。それらを含めた学校生活，家庭生活の中から読書のよい習慣は醸成されてくるものであり，従って個別的な来歴をもつといえるのである。

さて，提出された読書感想文を処理する評価の段階は，先の動機づけに対応し，短時日に終了させる必要がある点で相違する，重要な仕事である。私は，まず，自分を伸ばすことのできる本に挑戦しようとしているかどうかで，意欲の有無をみたいと思う。次に，選んだ本を深く読み，よく考えているかどうかという点に注目するのであるが，それらは感想文の量の面にも反映するのが普通である。そうして，感想文自体が感動的で，それを読んだ人がその本を読みたくなるような文章であれば申し分ないのである。そのような読書感想文に対しては，読書のしつけ的な注意や表現形式面の指導事項ではない，私なりの批評が可能になってくる。

以下に掲げる入賞した感想文は，それぞれについて最も本質的と思われた点を一つ，参考意見として述べた上で原稿を推敲させ，清書してもらったものばかりである。私なりの批評に応じて，文章を練り直してくる素直さ，これが中学生・高校生らしさであり，真にすぐれた読書感想文を生む素地であるといえるようである。そんなわけで，ここに掲げる感想文のそれぞれに，思い出深いものがある。

五年前，東京で表彰を受けた久岡さんの母親が，入賞した感想文の与しが本校に残されていたと知って，本当によい学校だと思ったと感想を述べられたのが印象に残っている。そういう読書に関連する諸条件の整備も，忘れてはならないことであるが，諸条件は，生徒諸君の読書歴の中に位置づけられて初めて意味をもつものであることもまた当然であろう。

今回，この読書感想文集を出すにあたって，同窓会から規約第4条，第3項による後援を受けた。それを含め，読書感想文に関連ある多くの方々の厚情に，心から感謝して序文とするものである。

以上

この小冊子の中の一編，51年度高一の平山知佐子が書いた読書感想文「生きるための自由を読んで」について，その指導記録を求められたので，「学校図書館研究紀要　昭和51年度版　№18　愛知県学校図書館研究会」に，私は次のように一文を寄せた。

資料 2

本校は附中と一体である関係で，この平山佐知子が中学生であった時から引き続き，国語の授業等で指導してきている。すでに，中二の時に「花咲か」についての読書感想文が愛知県最優秀に入賞し，中三の時にも「自然・文学・人間」を読んだものが愛知県優秀に入賞している。従って，現在では，原稿用紙の書き方等については注意する必要を認めないのである。

今回の入賞作の素材が夏休み宿題として提出された時に，私が批評したことは「この石川達三の本を読んで新しく発見したことは何かがわかりにくい。」という，最も肝要と思われる一点であったが，その評に応じて感想文を二度も書き直してくる素直さと熱意とを示した。

読書する本の選択は本人任せであるが，自分に最適なものを選ぶ能力を持っており，安心して見ておられ

る生徒である。その根拠は，この生徒が良い読書の習慣を身に付けてきているところにあり，私は，読書活動そのものについての指導の基本は読書を習慣づけるしつけにあると考えるのである。読書感想文は，それらの教育経過を総合するものということができ，多くの生徒が意欲的に書いてきてくれるという実感を大切にしたいと思うのである。

以上

また，この平山知佐子が，52年2月5日に東京で表彰されたとき，その読書歴について私がまとめて提出した文章を，次に再録するのであるが，中学や高校の読書感想文指導が占める役割りを具体例をもとにして理解できる文章になっており，生徒個人の生育歴に沿って学校教育を考えるということが，同時に家庭教育の在り方の重要性をも明確にしていくように思われるのである。

資料3

受賞者は，両親が佐賀県出身のため，佐賀県唐津市で生まれた。会社員の父親（電機関係の営業，事務）の転勤に従い，幼稚園時代は愛知県小牧市で過ごし，小学校一年生から四年生までを福岡県北九州市で過ごした。小学校二年の頃から，読書好きの父親の影響で児童文学書などを好んで読むようになった。本人は作文は好きでないと言っているが，小学校一年の時県の作文コンクールに佳作として入賞したことがある。小学校五年生から名古屋市内の小学校へ転校し，六年生にかけては読書からやや遠ざかった。

中学校は，本校と一体運営している名古屋大学教育学部附属中学校へ入学し，その頃名古屋市郊外の現住所に居を定めたので，そこから市内の附中へ片道約一時間の通学をするようになった。また，母親が自宅でピアノ，エレクトーン教師を始めるようになり，父（現在51歳）母（現在41歳）本人の三人家族は不自由のない家庭環境にある。受賞者の趣味は，読書とピアノ演奏である。

受賞者の中学校時代からは，直接指導してきているが，よく考えた意見を活発に述べる生徒である。中学校時代の読書傾向は，以前からのフィクション物好きが発展して，現代小説や外国文学に対する興味となり，読書量が増加するようになった。中でも印象に残っているのは，芥川龍之介であった。各教科ともよい成績を上げ，総合成績はクラス三番以内であった。中学校二年の時に，「花咲か」を読んだ読書感想文が愛知県の最優秀に入賞し，中学校三年には，「自然・文学・人間」を読んだものが，愛知県の優秀に入賞している。

本年度は，引き続いて名古屋大学教育学部附属高等学校に進学したため読書量がやや減少したが，読書傾向としては，ドキュメンタリー物とか，外国文学の翻訳物ことにモームなどの作品などを意識して読むようになった。今回入賞した「生きるための自由」についての感想文は，夏休み宿題として提出させた素材に対する私の評言を取り入れて，二度書き直してきたものである。高校生らしい忠実な読みと助言を活用できる素直な人柄が生み出したものといえよう。

附高生になっても，各教科ともよい成績であり，総合成績はクラス五番以内にある。生徒会活動の面では，リーダーシップをとるというのではなく，慎重に考えながら協調することで執行部に参加しており，勉強と両立させようとしている高校一年生である。

以上

ところで，こうしたコンクール応募型の読書感想文指導が応募資格者の生徒全員にとって，自己修錬の具として受け入れられるには，読書感想文を評価する事後指導に加え，動機づけを含めた事前指導が必要なことは前述した通りである。コンクール応募がその有力な動機づけとなるのは言うまでもないが，実際に読書感想文を書く折の直接的な目当てを事前に示しておく指導も見逃すことができない。その一つとして，優秀な作品を選定する基準を示すことが大切であると考えて，私は講評の形ではあるが我校の「図書館だより」51年10月に，次の一文を掲載しておいた。この主旨のことは，口頭で機会があれば，具体的にわかりやすく生徒に話して聞かせているところである。

資料4

夏休みの宿題として書いてもらった読書感想文を読んでみると，義務を果すために書いたらしいものから，意欲的に書かれたものまで種々なものがあります。また学年により熱心に取り組む傾向を示すところとそうでないところが目立ちます。

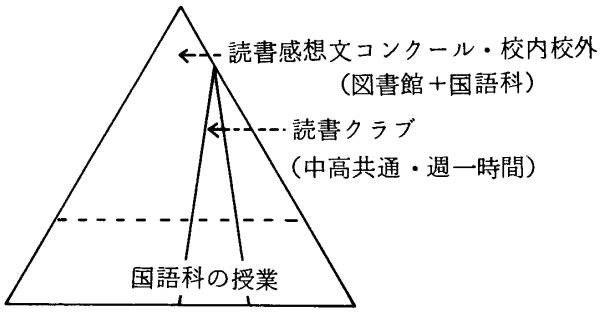
意欲や熱意を次のような点で判断しています。第一に自分の力を伸ばすことが出来る本に挑戦しているかどうかということです。第二に，書かれた感想文が質的に充実し，それに伴ない量的にも読みごたえがあるかどうかということです。

意欲的に書かれた感想文の中から，入賞作を選ぶ段になると，まず，選んだ本を深く読んでいるかどうかを問題とします。次に，これは私独自の考えの一つですがその感想文を読んだ人がその本を読みたくなるような文章であることを選定基準とします。

以上

Ⅱ　読書感想文の位置づけについて

読書感想文は中等教育の中でどのように位置づけされるのであろうか。次図は，我校におけるその位置づけの模式図である。



三角形の頂点の読書感想文を書く生徒の帰属する部分を引き上げるのが，コンクール応募型の読書感想文指導の目標であると言えるのであるが，小規模校の我校では学校図書館を校務分掌している国語科の特定教官一名が担当する習慣になっており，夏休み宿題の形で年一回の学校行事として実施する際の取りまとめに当っている。必修クラブの読書クラブは幅の広い生徒を対象に，読書のしつけから読書の楽しみへを目標に読書感想文指導の導入的な扱いを中心にして，週一時間，中高共通で行っている。

図の底辺部で大多数の生徒が帰属している，読書感想文を不得意とする部分の水準向上は，コンクール応募型の指導では落ちこぼれる部分がでるので，学校図書館活動の間接的な指導に加え，直接的には国語科の授業で担当していくことになる。読解と作文の授業が読書と感想文への展望のもとに，日常的に行われていくのである。この国語科の授業の充実が期されなければ，コンクール応募型の指導はそれだけが浮き上ってしまい，学校で取り組む意義が減ってくるわけだが，我校の場合は国語科教官五名全員が，勤務年数が長いという状況から，共通の理解が得られやすく国語科の授業とコンクール応募型の読書感想文指導との間に違和感を生じていないのは幸であると思う。

さて，国語科の授業における読書感想文指導とその基盤となる読解能力や作文能力養成の次第を模式化して次に掲げてみよう。

読　書	読書感想文	課　外
読　解	読後感想文	授　業
理　解	感想文(作文) (短文)	

このそれぞれの段階において，導入・展開・終結のいずれを重視していくか，教材として何を用いその教材のどこをどこまで扱うか，それらの指導をどう評価していくかという問題が発生するのであるが，この稿では，国語科教育の内容や方法については省略に従い，読書感想文の位置づけを明確にするにとどめたい。

Ⅲ　読書感想文集からの教材発掘

読書感想文の事前指導の常道は，適切な読書案内をすることに尽きると言える。その材料として，中高生の書いたすぐれた感想文で扱っている文学作品等を調査し，利用することを考えてはどうかと思うのである。従来からの読書案内が大人の眼からのものであるのに対し，中学生や高校生の感銘というフィルターを通した読書案内をも作るべきだという着想が浮かんだのである。それは，新鮮な多くの読書感想文に目を通している間の発想であった。そこから，読書教材の発掘が可能になるのではなかろうかと考えたのである。

そこで，毎日新聞社刊「考える読書　中学・高校の部」の，22回，21回，20回，18回の読書感想文について集計分類してみたのであるが，その中の一類の日本文学の上位に位置するものについて，作者ごとに掲載された編数と読まれた作品名とを列記して，このような読書案内の特色について一考願う提案とし，詳細は紙面の制約により省略に従うことにする。

太宰　治	26	走れメロス　人間失格　津軽　斜陽　きりぎりす　富嶽百景　桜桃
芥川龍之介	24	羅生門　鼻　偷盗　地獄変　芋粥　芥川龍之介集
夏目　漱石	22	吾輩は猫である　文鳥　坊っちゃん　三四郎　こころ
遠藤　周作	12	ヘチマ君　沈黙　白い人　死海のほとり　火山　海と毒薬
志賀　直哉	12	清兵衛とひょうたん　和解　小僧の神様　城の崎にて　暗夜行路　志賀直哉全集
有島　武郎	8	小さき者へ　生まれ出づる悩み　或る女
井上　靖	6	夏草冬涛　敦煌　天平の甍　しろばんば
林　芙美子	6	風琴と魚の町　放浪記
堀　辰雄	6	風立ちぬ　美しい村
武者小路実篤	6	友情　幸福者
森　鷗外	6	高瀬舟　最後の一句
有吉佐和子	5	華岡青州の妻　紀の川　恍惚の人
井伏　鱒二	5	山椒魚　黒い雨
高村光太郎	5	智恵子抄　道程
大岡　昇平	4	俘虜記　野火
石野径一郎	4	ひめゆりの塔
菊地　寛	4	父帰る　恩讐の彼方に　形　菊地寛集

北	杜夫	4	幽霊　木精　どくとるマンボウ昆虫記
木下	順二	4	夕鶴　オットーと呼ばれる日本人
深沢	七郎	4	楢山節考
山本	有三	4	路傍の石

Ⅳ　結語として

読解指導と読書指導の相違点の根源は何かについて考えていくならば，その答えは，指導目標の相違と目標に照らしての評価の違いに落ち着くだろうと思われる。読解指導にあっては，指導目標の設定が比較的容易であり，その評価も客観的に行いやすい条件にあるが，読書指導にあってはそれらが全く困難であり，従って敬遠される傾向にあることは否めないところである。また，上級学校の入試や就職試験と直接関係のないこれらの領域は，国語科の授業では扱わない傾きがある。

同様のことは感想文指導という，作文指導の領域についても言えるのであり，国語科教育の中における読書感想文指導は，指導時間を課外の家庭学習にたよらねばならないことと合せて，なかなか実施困難なものがある。仮りに，授業時間内でミニ読書感想文指導が可能である場合にも，指導目標の設定とそれに照らしての評価の困難さは，相変らずのものがあろう。

私は，読書感想文指導が成果を上げるかどうかは，指導目標と評価法が確立しているか否かにあると考えるので，「読書感想文の評語の一般化」（目標達成度を目安にする読書感想文の評価）という一覧表を作成しており，そうすることによりいくらか自信の持てる読書感想文指導を心がけることができるようになったと感じている。それは，国語科内の読書感想文指導であろうと超国語科的なものであろうと別に抵抗もなく適用できる，出来上りつつある一つのモノサシであると言えるものである。